

6年「今も受けつがれる室町文化」にプラスワン

(教科書では『小学社会6上』p.48～53)

室町時代に生まれた文化の中には、現代まで受け継がれているものが数多くある。過去と現代をつなぐもの、それが「文化」である。文化の学習を通して、歴史は、単に「過去の出来事」ではなく、「現代の生活」の基になっているものなのだという意識を育てていきたい。

今回は、現代とのつながりを強く意識させるプラスワンや、体験活動を通して文化のよさに気付かせるプラスワンを紹介していく。

1 「つかむ」段階に、現代とのつながりをプラスワンして、関心を高める

教科書48ページには、慈照寺東求堂の同仁齋にある書院造の写真が載っている。この写真を33ページの「貴族の屋しきの内部」の写真と比較させれば、文化の違いや書院造の特徴に気付かせていくことができる。「どのように変化したのか」「変化した理由は何か」など、様々な「知りたいこと」を児童から引き出すことができる。しかし、室町時代とひとつ前の鎌倉時代を比べるのではなく、もうひとつ前の平安時代と比較して違いや変化に目を向けさせることに、違和感を覚える読者もいるだろう。

ここでは、異なるアプローチを提案したい。それは、現代に近い時代につくられた書院造の部屋の写真を提示する方法だ。現代に近い時代につくられた部屋にも書院造が取り入れられていることに気付かせることで、「変化しないもの」「現代にまでつながるもの」に注目させるのだ。

ここでは、教科書の第1時を2時間扱いで行った。

まず、書院造の部屋の写真を提示した。といっても、東求堂の書院造ではなく、右の写真だ。

これは、筆者の勤務校の近くにある区の指定文化財で、旧内田家住宅の一室だ。実は、子どもたちが3年生の時に社会科見学で行った場所である。建てられたのは、約120年前の明治時代だ。

そして、次に、教科書の東求堂同仁齋を提示した。

この2枚の写真を比べながら、感じたこと、考えたことを自由に発表させた。

旧内田家住宅について、次のような反応があった。

- C) 貴族の部屋ようだ。
- C) 別荘みたいなのに見える。
- C) 大事なものではないか。
- C) 掛け軸がかけられている。

東求堂については、次の発言が出された。

- C) 緑が見えてさわやかな感じがする。
- C) 障子がある。
- C) 一般庶民の家ではないか。
- C) おめでたいことを祝うような、豪華な感じがする。
- C) 歴史がありそうだ。

二つの共通点にも目を向けさせた。

- C) どちらも和室だ。
- C) 同じ形の棚がある。
- C) 畳やふすまがある。



↑旧内田家住宅の内部

現在、金閣は鹿苑寺、銀閣は慈照寺になっているが、どちらも相国寺派の寺院である。相国寺は禅宗の寺院だ。当時の足利将軍家は禅宗を守り、その考え方を建築物にも取り入れていった。

水墨画も鎌倉時代に中国から禅とともに伝わった。雪舟が修行したのは相国寺である。茶を飲む習慣も鎌倉時代に中国へ渡った禅僧が持ち帰ったのが始まりだ。

こうして考えると、室町文化のベースにあるのは、「禅宗の考え方」だといえる。教科書には禅宗については触れられていないが、現代とのつながりを考える上でも、押さえておくことをお勧めする。

禅はその後、「ZEN」として海外にも伝えられた。あのスティーブ・ジョブズも禅の教えのファンだった。自分の結婚式にも知り合いの禅僧を招き、京都へも家族で何度も訪れたという。

アップル社の製品に共通する、無駄をそぎ落としたデザインは、禅の考え方が影響していると言われている。授業の後半で、そのことに触れると、子どもたちの印象に強く残ったようだ。

学習感想は、「文化のよさ」や「現代とのつながり」を意識して書くよう指示した。

C) 金閣や銀閣は同じ禅宗の文化を入れている。禅宗は世界にも広がっている大きな文化だ。シンプルで何も加えない、「無」の心が禅のよさだと思う。

C) 昔、禅宗が中国から伝わり、今やあのスティーブ・ジョブズもやっていたなんて、本当にびっくりした。禅宗の「よけいなものはつけない」という考えは、とてもいいと思った。

C) 今でもシンプルな方が良いと言っている人がいる。その人たちは禅宗のえいきょうを受けているのではないか。

C) 今でも昔の建物がみんなに愛されていることが一番のつながりだと思う。たたみやふすま、しょうじが現代の日本の住宅に生かされていることもつながりだと思う。



「現代の書院造」や「スティーブ・ジョブズ」を提示することで、子どもは室町文化と自分たちの生活とのつながりを意識するようになったことが感想からうかがえる。

2 調べる段階に体験活動をプラスワンして、室町文化の素晴らしさを実感する

第3時は、水墨画や茶の湯、生け花について学習する。ここでは、ぜひとも「水墨画体験」を取り入れたい。「茶道体験」でもよいが、実施するためには、次の条件がそろっていることが必要だ。

①学級全員が入れる広さの和室がある。

②茶道を指導できる講師がいる。

③茶道を体験するための道具がある。

協力してくれそうな茶道の先生が、地域や保護者の中にいればよいが、そうでない場合、実施は難しい。ここでは、水墨画体験を短時間でを行うための工夫を紹介する。

水墨画を試しに描いてみればわかることだが、墨の濃さを調節することが初心者には難しい。水墨画の描き方を調べると、「濃墨」「中墨」「薄墨」の3種類の墨を使い分けながら描くようだ。この3種類をあらかじめ作っておくことで、時間の短縮を図った。

濃墨は墨汁をそのまま使う。薄墨は500mLのペットボトルにほんの少し（スプーン1杯くらい）の墨を入れ、あとは水を加えてよく混ぜるとできる。中墨は、もう少し墨を足して作る。

活動場所は、図工室や理科室のように4人1組で活動できる場所がよい。教室で行う場合は、4人ずつのグループに分け、机を合わせておく。図工室で使う絵の具皿を各グループ3皿ずつ配り、用意しておいた濃墨、中墨、薄墨を入れていく。墨は共同で使うように指示する。

絵柄は自由に描かせてもよいが、雪舟の『秋冬山水図（冬景）』を模写させることを勧めたい。雪舟の代表作であり、小さな作品なので短い時間で模写することが可能だ。自分で考えた絵柄だと時間がかかる場合があるし、アニメのキャラクターのようなものを描いても、室町文化のよさを実感することは難しい。模写するからこそ、筆遣いの巧みさや線の太さ、明るさを描き分けることの難しさを実感できる。

描いているときに児童が興奮して、おしゃべりするようになったら、「雪舟はおしゃべりしながら、この絵を描いたのだろうか。おしゃべりしながら上手に描ける子はいない。いい作品を描きたいと思ったら、口を閉じた方がいい」と伝えるとよい。

体験活動を入れると、雪舟などについて教科書で学習する時間が取れなくなるので、自分で教科書を読み、体験活動の感想を書いてくることを宿題にするとよい。

子どもたちは、次のような感想を書いてきた。

C) 雪舟のかいた絵は何度か見たことがあったけれど、実際にかいてみると想像以上にむずかしくて大変でした。

C) 実際に水墨画をかいてみて、雪舟の気持ちになれたと思います。また、静かなふんいきの中でかくことできちょうとした気持ちで絵をかくことができました。とても美しい情景の作品から、何をイメージしてかいたのかが、見ただけではすぐにわからない作品まで、雪舟はなぜさまざまなものをかいたのかが気になりました。

C) とてもうまくかかれた水墨画の作品を見て、昔にもすごい人がたくさんいることがわかって、なんか不思議な感じでした。あと、わたしが「秋冬山水図」を模写している時、みんなとても静かになって、その時、外の風の音や鳥の鳴き声が聞こえて、いいなあと思いました。

C) 水墨画は細かい作業などが入っていて、細かい小筆や大きい筆をうまく使ってかいていることがわかりました。家にかくのにも、どうやって角度をつけてかいたらいいのか、山を表現するにはどれくらい水を足せばいいのかなど、昔の人は墨の濃さをうまく使い分けていたのだなあと感じました。

(2019年1月)

あらし げんしゅう
嵐 元秀

東京都の公立小学校教師。教師歴30年。楽しみながら、調べ・考え・表現する力が高まっていく社会科授業を旨として研究・実践をしている。